

はじめに

岩手県は念仏信仰が非常に盛んな地域であるが、研究対象としてはいわゆる隠し念仏や念仏踊りが中心であり、実際の念仏信仰の広まりなどが研究されている例は少ない。

旧南部藩の地域には、現在も数多くの浄土宗寺院が分布し、百萬遍念仏をはじめとする浄土信仰が根付いている。

それに対し、岩手県でも旧田村藩領域には、限られた地域にしか浄土宗寺院は存在しない。しかしながら実際には百萬遍念仏をはじめ、さまざまな形で念仏が行われている。

このほど、その旧田村藩領内での念仏信仰について、いくつかの事例を取材することができたので報告する。

● 本論で扱う
岩手県の地域

今、岩手県南部地方にはほとんど浄土宗寺院がないと述べたが、本論で取り上げた地域は

まさにその浄土宗寺院のない旧田村藩領内で、現在の一関市から東磐井郡にかけての地域である。ただし、現段階ではこの地域を隈なく調査したわけではなく、主として鉦（ふせがね）を頼りに調査したものであり、限定された報告である。

今回調査させていただいた場所を図一（次頁の図、参照）に示す。ただし、写真などで間接的に確認した場所も含めては、わかった範囲で示してある。図の斜線を施した地域の内側には、現在浄土宗の寺院はないが、非常に念仏信仰の盛んな地域であることがわかると思う。

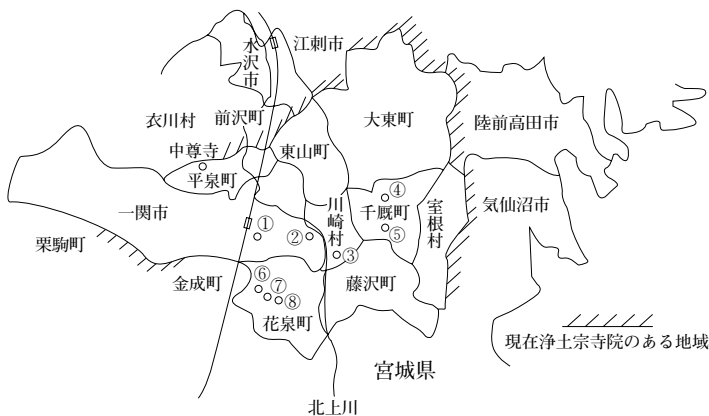
二

● 本地域の信仰梗概

安永年間（一七七二～一七八二）に出された『風土記』[※]から神社仏閣の記述を抜き出してみると、次のようである。

磐井郡西磐井一関村には、神社が十、弁財天堂や薬師堂などの仏閣が七、それに寺が六か寺存在した。寺の宗派は、臨済宗二か寺、真言宗二か寺、曹洞宗一か寺、浄土宗一か寺である。ほかに修験として四か院記載されている。この書には浄土宗の寺院が記載されているが、

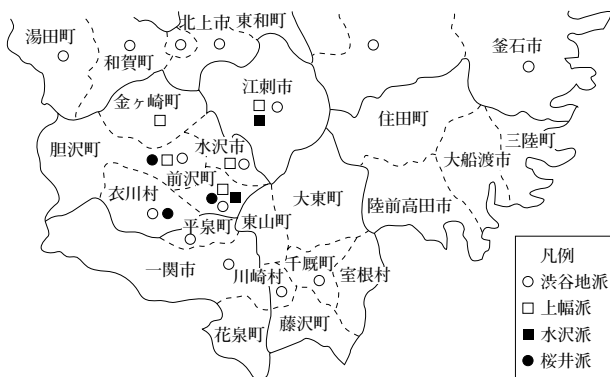
図一 岩手県南部地方概略図と調査対象地域



	住所	管理者	備考
①	一関市真柴中屋敷	小野寺氏	牧澤八幡神社氏子総代
②	一関市弥栄沼畑	長安寺	曹洞宗
③	東磐井郡川崎村薄衣	安養寺	曹洞宗
④	東磐井郡千厩町清田	伊藤氏	江戸時代肝入を勤めた旧家
⑤	東磐井郡千厩町鳥羽	井戸上氏	
⑥	西磐井郡花泉町	宝泉寺	曹洞宗
⑦	西磐井郡花泉町花泉		焼失
⑧	西磐井郡花泉町涌津	千葉氏	講中で半年ごとに持ち回りで管理

図二 岩手県における隠し念仏主要分布図

(門屋光昭『民族宗教シリーズ 隠し念仏』より)



現在は残っていない。

ほかに今回調査した地域では、当時から磐井郡流郷の清水村と金森村にはそれぞれ曹洞宗の寺院一か寺、磐井郡東山南方千厩村には曹洞宗二か寺、真言宗一か寺、同薄衣村には曹洞宗三か寺が存在していた。このように主として禅宗系の寺院があり、真言宗の寺院が点状している状況にあったようである。しかしながら、阿弥陀堂※2のような仏閣や、曹洞宗寺院でも本尊が阿弥陀如来である寺院※3もあり、浄土信仰と全く縁のない地域と言うこともできない。

『岩手県史』※4によれば、この地域の歴史的な信仰の流れとしては、十一世紀頃、修験道が現れ、密教系の信仰が強くなり、葛西氏が隆盛を極めると、その末系まで菩提寺や祈願寺を持つようになった。十四世紀になると、浄土教の影響により太子信仰や弥陀信仰によるまいるの仏が一般化してきたと言う。

江戸時代に限って見ても、教派神道、仏教、キリスト教などの教団と、民間信仰の講、隠し念仏、まいるの仏などが指摘されており、さまざまな信仰が入り交じって本地域の宗教を形成していたことが示唆されるのである。

岩手県独特の信仰形態として調査研究されているものに、先のまいるの仏のほかにもオナイホウ、オシラサマなどがあるが、阿弥陀信仰※5と結び付いているのはまいるの仏とオナイホウあるいは隠し念仏と呼ばれるものである。

まいるの仏とは、年に一度日を決めて、六字名号、阿弥陀如来像、聖徳太子などの掛け軸

を掛け、お参りして新穀や精進料理などを食べる。これらは、聖徳太子信仰などと結び付いていることから真宗の影響を受けたものと推される。

隠し念仏についてはさまざまな研究が行われており、密教由来であるか、真宗由来であるかが、論争的となっている。しかし、実際はそれらが入り組んだ信仰形態となっているようである。門屋光昭氏の研究^{※6}によれば、本地域でも渋谷地派の隠し念仏が確認されている。

門屋氏の調査から引用させていただければ、図二(三三四頁、参照)に示されるごとくである。このように本地域には、寺院としての後押しがなかったにせよ、浄土系の念仏が広まる民間信仰的な素地は十分にあったことがわかる。

また、参考として、門屋氏の調査から百萬遍に関係するところを一部引用させていただく。県南の胆沢郡胆沢町若柳地区で百萬遍念仏碑が確認されており、その建立年代は、明和元年(一七六四)である。残念ながら今は何に使われていたか伝承されていない。

胆沢より少し北側の和賀郡和賀町岩崎地区にも、百萬遍供養碑および百萬遍講の存在が報告されているが、門屋氏は渋谷地派講中の行事を指していると推測している。二月八日と十一月八日の年二回、子供たちがヤドを回り大念珠を回して念仏する行事である。隠し念仏は真宗系の念仏であり、百萬遍を浄土宗系の念仏とするならば、本来別々に伝えられたであろうことが考えられるのであるが、今では一つの念仏行事として融合しているようである。

以上、岩手県南部地域の信仰について概観してきたが、さまざまな宗教が入り組み、融合

し、また家単位、講単位、地区単位での広がりの中から、元々の伝承形態やその起源というものが不明瞭となっているのもこの地域の特徴と言えるかもしれない。このような状況の中で、今回調査した地域範囲での念仏の分類あるいはその意図、そしてその伝播について幾分の知見が得られたので、以下に報告したい。

三

ふせがねを用いた 念仏の分類と事例

最初に、今回調査した場所で、現在民間信仰として行われている念仏の事例を紹介する。大別すると次のように分けることができる。

I、念仏の修法による分類

① ふせがねによって拍子をとる念仏

a. 棺前で行う念仏

b. 墓前で行う念仏

② 数珠を回しながら、ふせがねを打つ念仏

a. 十三仏信仰と結び付いた念仏

b. 浄土宗的な百萬遍念仏

ここで、①に分類される念仏は、お通夜のように、棺前で行う念仏であり、また初盆のときに墓前でふせがねを打ち鳴らす念仏である。

棺前で行う念仏は、千厩町の鳥羽で確認した。ここでは、個人の家でふせがねを管理している。

この地区では火葬後葬儀をする風習であり、火葬が済んで葬儀を出すまでの期間に、ふせがねをたたき棺に向かって念仏をする。念仏は、寺院とは無関係になされている。

この家のふせがねの起源については、銘がないので明確ではないが伝承があり、宝暦八年(二七五八)に鑄造された梵鐘と一緒に作られたものであると^{※7}言う。近くの奥玉村は鑄物の盛んな場所であり、その梵鐘は現在文化財として現存している。

これが事実とすれば、宝暦年間(一七五一―一七六四)にすでにこの地域には相当念仏が広まっていたことが示唆される。

次に、墓前でふせがねを打ち鳴らして念仏する習慣がある。これは初盆のときに行われるが、棺前で念仏する風習よりかなり広い地域で行われている。^{※8}

②の数珠を回しながら念仏する修法にも二通りの念仏がある。一つは十三仏信仰と結び付いたものと、もう一つは浄土宗的な（ただナムアマダブツと称^よえる）念仏である。

十三仏信仰と結び付いたものは、数珠を回しながら、「フドーミョーオー ナムアマダーナムアマダーブツ ナムアマダー」というように称えていき、数珠が七周するたびに十三仏を順に称えていくものである。通夜の晩に十三仏を称え、故人の冥福を祈る形式のものである。

この事例は、川崎村安養寺という曹洞宗の寺院で行われているものである。数珠の保管は寺院でしているが、念仏は住職とは無関係に行われている。^{**9}

ここで使用されているふせがねには、

左側「宝永七庚寅年正月吉祥日」

右側「米藏山安養十二世現住木真置之」

のように、宝永七年（一七一〇）に安養寺十二世の木真という当時の住職が、これを置いたことが刻まれている。すなわち、曹洞宗の寺であっても念仏の広がりを見ることができず、あるいはそれを積極的に取り込んで、ふせがねを置くに至ったことが推察される。密教系の念仏が葬送儀礼と結び付いた事例と言える。

ただし、先に述べたようにこの寺院の本尊は阿弥陀如来であり、何らかの浄土信仰との関係が連想されるのであるが、この風習は先の密教系の念仏、いわゆる秘密念仏から派生したものと見ることもできよう。

他方、念仏信仰の代表的形態として浄土宗の百萬遍念仏があるが、それについて次に見ていきたい。

四

● 浄土宗由来の 百萬遍念仏の分類

現在この地域で行われている百萬遍念仏でも、浄土宗由来と考えられるものが伝えられている。これについても、その目的や管理者から分類を試みる事が可能である。

Ⅱ、浄土宗由来の百萬遍念仏の分類

① 管理者による分類

a. 念仏講

- b. 地域の有力者（昔、肝入を勤めた家など）
- c. 寺院

② 目的による分類

- a. 病氣平癒などの現世利益
- b. 葬送儀礼として故人の往生を願う

その管理者や修行者の観点から大別すると、講組織を作つてその講の中で行ういわゆる念仏講として行うもの、二番目は肝入などの役職にあつた有力者がふせがねや数珠を管理し、その支配地域で行うもの、三番目は寺院が管理して、その檀信徒が念仏を行うものに分けることができる。

講組織を作つて百萬遍念仏を行っているのは、花泉町の涌津地区で確認したが、その由来は明治時代末から大正年間と新しい。その名称も「八雲神社御精進講中」とある。

二番目は、江戸時代に肝入として活躍された方がふせがねと数珠を管理し、近所で不幸があると、その数珠を貸し出すというものである。

三番目は、ふせがねや数珠を寺院で管理しているが、その主体はあくまでもその寺の檀信徒であり、やはり不幸があると檀信徒が借りにきて念仏をするというもので、寺院は単に道具を保管しているにすぎない。念仏に僧侶が参加することはなく、親族が中心となつて行う

ものである。

次に百萬遍を修する目的であるが、二通りの目的でなされている。一つは病氣平癒という現世利益的な念仏であり、もう一つは葬送儀礼に組み込まれ故人の往生浄土を願うためのものである。

五

● 現世利益の 百萬遍念仏の事例

次に個々の事例について聞き取りなどの調査の結果を報告する。

今回の調査で、明らかに現世利益の念仏を行っている事例は、先に講を形成して百萬遍を修していると述べた花泉町涌津の一案所であった。

この百萬遍念仏の由来は、江戸時代の涌津城主岩淵家の末孫の娘が病氣となり、本家より百萬遍の念仏を修して祈願するように、数珠を譲られたのが始まりと伝えられている。^{*10}

ただし現在では、病氣に関係なく春と秋の彼岸の中日に講の人が集まり、疫病を除くために行っている。この講は昭和十年（一九三五）の入講者が最後で、十八軒の家で構成されている。名称は「八雲神社御精進講中」というように、本尊も大正十年（一九二一）に彫刻さ

れた八雲神社の御神体で、この像を床の間に安置し、百萬遍を修している。数珠箱に書かれた講員名簿の順に、数珠箱と御神体を半年単位で管理している。この講の規約として、

御神酒 壹舛

御饌米 壹舛

金 貳拾錢

時間午前拾貳時

持寄白糯米六合

と数珠箱の裏側に記されている。百萬遍のあと、皆で会食をしたことがうかがわれる。

数珠箱には一緒に版木があり、

表 「大般若理趣分守札 五福院」

裏 「百萬遍疫病悉除之攸」

とある。五福院とは八雲神社の別当寺院で、明治維新前は修験道であった。

このように、修験道や真言密教の影響を受けているにもかかわらず、行われているのはご

く平凡な百萬遍念仏であり、ふせがねをたたきながら「ナムアマミダーブツ」と数珠を回していくものである。その撞木には、

背 「講中敬白」

腹 「是呼吸スルコト百萬遍」

と書かれているものもあった。呼吸数が百萬遍になるのを目安としたのであろうか。

あとで述べるが、ここに伝わるふせがねと数珠は、その銘などから江戸中期の浄土宗の祈祷念仏の影響を受けており、百萬遍念仏は浄土宗由来であることがわかっている。長い歴史の中で、病氣平癒祈願のためにさまざまな思想と結び付きながらも、当初の形態をとどめている事例とすることができよう。

六

● 葬送儀礼としての
百萬遍念仏の事例

現在修されている百萬遍念仏の大半は、葬送儀礼の一部として行われている。火葬と土葬

で修する時期のずれはあるものの、ほぼ同様のことが行われている。

一 関市弥栄の長安寺の檀信徒の事例を紹介する。

百萬遍を修するのは、火葬した晩から葬儀の前の晩までである。人が亡くなると親族が寺へ数珠とふせがねなどを取りに行き、火葬後の晩から、身内、親族、隣組の人が交代で数珠を回す。ふせがねをたたく人に特に決まりはなく、「ナムアマミダーブツ」と四拍子でたたく。この際、寺の住職はいつさい念仏にはかかわらない。

この寺は現在曹洞宗である。開基は阿部氏と言う。阿部氏は流郷の大肝人を勤めた家柄で、阿部家からこの数珠が持ち込まれた可能性もあると言われている。^{*1}

土葬の事例として挙げられるのが、一関市真柴地区の例である。ここでは現在百萬遍は行われていないが、昭和四十年（一九六五）頃までは記憶があるとのことである。^{*2}

土葬の場合、葬儀が終わり墓地から戻ってから、家で数珠を回しながら念仏し、その後初七日まで毎晩行う。初七日には、オカミサマという口寄せを介して故人と接する風習があり、初七日以後は行わない。

ここにも木版が残っており、上に「牧沢念佛中」と墨書されている版面は、

奉修念佛百萬返祈念之処

と刻まれている。昔は、直接葬送儀礼と結び付いたものではなかったことが示唆される。

いずれにしても、現在に近いところでは、葬送儀礼として行われている。この場合、火葬のときは葬儀が節目となり、土葬の場合は初七日が区切りとなっているが、故人の冥福を祈るものであることには変わりがない。その念仏の形態も極めて浄土宗的であると言える。

上記の二例の場合も、そのふせがねと数珠は、浄土宗の祈禱念仏の影響によるものであり、目的は変わっても修法そのものは、多少簡略化の傾向はあると思われるが、あまり変化がないと考えられる。

七

● 百萬遍念仏の 受容に関する 一考察

今回調査した地域における百萬遍念仏の由来について、その起源はともかく、その数珠箱に書かれた由来書やふせがねに刻まれた銘から、その伝播に江戸中期の祈禱念仏がかかわっていることがわかっている。

この百萬遍念仏のセットは、大数珠、ふせがね、数札、数珠箱それに本尊としての利剣名号と宝珠名号で構成されている。当時からほぼ完全なセットとして伝えられているものを、

千厩町清田（旧清水馬場村金山）で肝入を勤めた家柄の伊藤家で確認した。

祈祷念仏の意味については「平成八年度浄土宗総合学術大会」において発表^{※13}しているので重複を避けるが、この百萬遍のふせがねは祐天寺の中興六世得譽祐全（二七二八〜一八〇五）が開山顯譽祐天（一六三七〜一七一八）の五十回忌（明和四年、一七七七）に合わせて五十個作らせたものの一つであることが刻まれている。そして、数珠と数札から、この百萬遍念仏の目的が祈祷念仏にあって、利剣名号を本尊とし三界の厄難を断除せんと願い、宝珠名号を本尊とし現当二世の貧窮を救済せんと願ったものであることがわかった。この念仏を提唱したのは、『専修祈祷論』を著した浄土宗の大我^{※14}（二七〇九〜一七八二）である。

この地域の念仏の起源に関しては、いまだに明らかとは言えないようであるが、宝暦年間には、すでに真宗系、密教系などさまざまな影響を受け、念仏が広まっており、百萬遍念仏を受け入れる素地があったことは容易に想像できる。しかしながら、念仏を称えるという意味で百萬遍を受け入れることは容易であったであろうが、その目的という面ではどうか。

密教系の現世利益と真宗系の極楽往生という二つの相異なる目的のもとで、念仏信仰が定着していったのであるが、百萬遍の位置付けとしてはどのような目的があったのであろうか。

この問題について明確な回答を出せるわけではないが、言えることは、大我の理論をそのまま受け入れたのであれば、まさに現世利益の念仏と往生浄土の念仏の融合が図られたこと

になる。これまでの研究から、密教系の念仏と真宗系の念仏が複雑に入り組んでこの地の念仏信仰が定着してきたことが言われているが、本論における百萬遍念仏もその一つの習合形態として受け入れられたことが推測されるのである。この地の念仏信仰に対する浄土宗のかかわりというものは研究されていないが、この旧田村藩に限って言えば、まさに浄土宗の念仏の定着が、この密教系と真宗系の念仏の融合にあつたのではなからうか。それが百萬遍を受容させ、現在でも現世利益的百萬遍と葬祭儀礼としての百萬遍につながっているのではないかと推測されるのである。隠し念仏のような秘密性はないが、大勢の人々が一つの数珠で結ばれて念仏するという形態は、時間の経過があつても何ら変化するものではなく、儀礼的には当初の形態がそのまま引き継がれているものと考えられる。ただ、時間の経過とともに、本尊の意味が忘れられ、当時の本尊を守護するところもほとんどなく、神仏習合思想が入り込み、またそれが分離したことによって、現在は御神体を本尊にする例もある。

このような変遷はあるものの、百萬遍が百萬遍として受け入れられ継承されていることに、隠し念仏とは違った民俗信仰的な意義が見出されなければならないと考える。

おわりに

調査が不完全であり、また地元との縁も薄く、信仰の下地などもわからぬまま、たまたまご縁のあったところだけでまとめさせていただいた。何度も述べてきたように、この地域の特徴のある念仏や隠し念仏などが比較的多く調査されているほど、百萬遍などの信仰形態については県史や町史その他の民俗資料にもほとんど見当たらない。この未熟な論文がきっかけとなり、さらなる調査研究が進むことを願っている。

なお、本論を発表するにあたって、岩手県一関市教育委員会博物館建設対策室の鈴木幸彦氏をはじめ花泉町教育委員会の方々、千厩町教育委員会の方々、それにご当地の多くの文化財調査委員の方々をわずらわし、また快く取材を受けてくださった方々に感謝の意を表します。

参考文献

※1 『宮城県史二七（資料篇五）』（昭和三十四年）

※2 例えば、「磐井郡東山南方薄衣村風土記御用書出」の仏閣の項に、阿弥陀堂の記述があり、別当として修験の大泉院が管理していた。

※3 「同書」の寺の項に、米倉山安養寺という曹洞宗寺院の本尊が阿弥陀如来と記され、現在まで伝わっている。

この寺は今回の調査対象であるが、開基以来浄土宗からの転宗等の記録はない。

※4 『岩手県史四(近世篇一)』(昭和三十八年)

※5 森口多里『日本の民俗 岩手』(第一法規、昭和四十六年)

※6 門屋光昭『民俗宗教シリーズ 隠し念仏』(東京堂、平成元年)

※7 管理者の井戸上氏談。

※8 千厩町文化財保護委員菅原弘太郎氏談。

※9 川崎村文化財調査委員米倉民雄氏談。

※10 講中千葉隆之氏宅での聞き取り調査による。

※11 長安寺住職佐藤陸雄上人談。

※12 管理者小野寺軍蔵氏談。

※13 「現世利益の一面——利剣名号と宝珠名号——」『佛教論叢』四一、(平成八年)

※14 『浄全』十九、五〇九頁の「略伝集」に伝記を載せる。